

インドネシア語劇のつくりかた

著者名(日)	飯島 明子, 舟田 京子
雑誌名	国際社会研究
巻	3
ページ	189-196
発行年	2012-12
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00000745/

教育活動事例

インドネシア語劇のつくりかた

飯島 明子*・舟田 京子**

Educational Activities

How to Create Indonesian drama

IJIMA Akiko*
FUNADA Kyoko**

1. はじめに

国際言語文化学科インドネシア語専攻(2012年度からはアジア言語学科インドネシア語専攻)では、毎年10月の浜風祭で2年生によるインドネシア語劇の公演がある。神田外語大学外語学部の中で、学園祭の演し物として毎年欠かさず語劇を行っているのは、現在ではインドネシア語専攻のみである。学習しはじめてわずか2年目の言語で劇を演ずるのは難しいことに違いない。それでもチャレンジする心意気や良し、と私(飯島)が初めて観に行ったのは2008年の浜風祭のときだった。観る前は正直に言ってそれほど期待してい

* 神田外語大学イペロアメリカ言語学科 准教授。Associate Professor, Department of Spanish and Portuguese, Kanda University of International Studies.

** 神田外語大学アジア言語学科 教授。Professor, Department of Asian Languages, Kanda University of International Studies.

なかったのだが、学生達はなかなかの熱演であり、よく稽古を積んだことがうかがえた。手作りらしい「城壁」や「森」などの大道具も丁寧に作られている。舞台上手に控えるガムラン楽団「ムルデカ」の演奏が要所所で場を盛り上げ、最後は本格的なバリ舞踊でにぎやかに幕を閉じる。インドネシア語が全く分からなくても大丈夫のように、パワーポイントによる字幕つきなのも嬉しい。

しかし話は「頑張ったね」ということだけでは終わらない。このインドネシア語劇は台本を作るところから学生が行うという、語学教育プログラムの一環なのである。ではゼロの状態からどのようにして語劇が出来上がるのか。そのプロセスを見てみよう。

2. 台本から上演まで

半年がかりで語劇を作り上げる主体となるのは、インドネシア語専攻2年生が履修する「インドネシア語基礎 3b」という授業である。担当教員の舟田京子先生にお話をうかがった。

— 台本の元になっているのは民話のようですが？

「そうです。インドネシアの民話の本を底本として使っています。色々なものがある、例えばこちらは小学校低学年向けの絵本(写真1)。これはたくさんあります。高学年用のものになると字が多くて絵はだんだん少なくなりますね。こちらは大学生用。日本の文部科学省に当たる機関が編纂していて、採録した地域の地図も付いている専門的なものです。」

— 地域はどこのものが多いのでしょうか？

「色々ですね。バリ島のももちろんありますが、さまざまです。インドネシア



写真 1. (舟田京子 撮影)

は広いうえで民族が多様で、細かく分ければ250の民族、少し大きく分けても30~40の地域に分けることができます。地域によって民話にも特色がありますね。統計は取っていないけれど、森が深そうなところ、特にティモールやパプアのお話では動物や鳥が出てくるものが多いようです。」

— 全部インドネシアで購入されたものですか？

「そうです。日本ではまず買えません。こちらは出版事情が日本と違って、増刷も再版もないようです。なので、インドネシアに行った時に書店で出会った本は逃さず買わないと、二度と手に入れるチャンスはありません。書名をチェックしておいて日本で注文、ということもできないのです。その間に

在庫がなくなっていればアウトですから、とにかく会った時に逃さず買わないと。」

— では、ここにある本ももう出版されていないのでしょうか？
「そういうものがほとんどでしょうね。だから本はとても貴重です。」

— こういう民話集の中から、学生が台本用にどれかを選ぶのですね？
「そうです。やはり語劇として演ずるのに相応しいものをみんなで話し合いながら選びます。」

— どんなものが相応しいでしょう？
「ああ、それはやはりハッピーエンドでないよね！ 来たお客さんたちが楽しい気持ちで帰れるように。それから演じている本人たちも楽しくなるようなものが良いですね。色々な苦労があっても、主人公たちが最後には幸せになる。王子様と王女様の話は学生たちにはやはり人気です。終幕はにぎやかにしたいので、必ず結婚式を入れます(写真2)。ガムランと結婚式の踊りで華やかに終わることができますから。場合によっては台本を作る時に、底本の結末を変えてしまうこともあります。恋人が死んで、死んだ所から花が咲いた、という話では、生き返らせちゃって(笑)結婚させちゃう、とかね。ヒロインを殺したお姉さんも、底本では殺されて終わりだったりするけれど、改心してめでたしめでたし、にしちゃいますね。」

— それは楽しいですね(笑)。
「底本を決めたら、まず2回から3回分の授業で講読をします。そこでちゃんとストーリーが分かりますから、今度は学生達が分担して台本を作ります。ナレーションも入りますが、ナレーションばかりでは劇にならないので、底



写真2. (小菅伸彦 撮影)

本の地の文を元に会話を作り、台詞にしていくわけです。」

— それは日本語で？

「いえいえ、インドネシア語で。ですからこれはインドネシア語を元にして意味の通じるインドネシア語を作文する、という勉強でもあるわけです。とても良い勉強になりますよ。もちろん書きっぱなしでは良い文章にはなりませんから、スヨト先生と私で赤を入れ、学生が書き直す、ということを繰り返します。出来上がった全員分のものを最後にまとめて1つの台本にします。大体A4で7枚～8枚くらいになります。演じれば40分ほどです。面白いのは、別々の年に同じ底本を選んでも、学生が違えば全く違う台本になることです。ストーリーは一緒でも台本が違いますし、登場人物の性格などについ

での学生の考え方も違いますから、全然違う作品になるのです。インドネシア語の台本が仕上がったら、次は日本語の台本を作ります。」

— 日本語の台本というとは？

「しゃべるためのものではなく、字幕用のものです。これがないとお客さんに理解してもらえませんから。日本語の台本も分担して学生が作ります。今度はインドネシア語を日本語に翻訳する勉強ですね。日本語台本は場面ごとに配分して字幕にします。あまり字が多すぎるとお客さんが読めませんので、工夫が必要です。字幕のパワーポイントは後期から留学する学生たちが作ります。浜風祭は10月なので、留学組は出られないのですね。でもパワーポイントを作ることで参加しているわけです。それから学生たちで相談してあまり不公平がないように配役を決めます。私たちは、主役だけではなくどんな端役も大切だ、と励ましています。役がない学生もいます。どうしても照明やパワーポイント操作で2名から3名は必要なので。しかし全員で一緒に一つのことを仕上げて結果を出すことはとても重要です。留学組も含めて全員が一丸となって取り組むわけですから、結束力も強まるようです。」

— 台本が出来上がるまでどのくらいかかりますか？

「4月からはじめて早ければ6月末、遅くとも7月はじめまでかかりますね。できるだけ早くしなければならぬのですが。というのも7月はじめから立ち稽古が始まるからです。これは皆川先生が指導されます。」

— プロでいらっしゃいますものね。

「そうなんです。皆川先生がいらっしゃらなかつたら、とてもこの語劇はできません。ガムランもありますし。昨年まではスヨト先生も一緒に指導して下さいました。スヨト先生はインドネシアで演劇の経験がおありですので、素

晴らしいご指導でした。夏休み中は2名の学生監督を中心に、学生たちが自主練習をしています。夏休み明け、9月中旬から本番直前までの1ヶ月間は集中して稽古する時期です。この頃は稽古現場のビデオを撮って、学生たちに見せながら声や動作、表情も自分でチェックさせます。学生たちはインドネシア語の台詞を覚えますから、発音やイントネーションも良くなります。インドネシア語専攻の同窓会では、語劇で覚えた台詞でやり取りすることもあるんですよ。若い内に覚えたものは忘れませんね。」

— 大道具などにもお金はかかると思うのですが、資金はどうしているのですか？

「学生たちが自前で500円ずつ出し合って、その中でやりくりしています。私は衣裳などを提供しますが、大道具は学生たちが作ります。近所のスーパーで段ボールをもらってきて、切って色を塗ったりして、なかなかきれいに作りますよ。年によっても色々で、例えば同じ木を作るにしても、ある年の学生たちは段ボールで作るし、別の年の学生たちはビニール傘を利用したりして、学生によってこんなに発想が違うのかと毎年驚かされます。大道具を作るあたりになると私の研究室は大道具置き場になります。その辺に城壁やらお城やら木やら、色々並びます（笑）。衣裳も大道具も、基本的には学生たちが考えて、教員はアドバイスをするだけです。」

— 当日観に来るのはどういう人たちが多いのでしょうか？ 毎年かなりの入りですよ。

「学生の両親や親戚が来ますね。『観に来ないでいいよ』なんて言う学生もいるのですけれど、大概はいらっしゃいます。それから同窓生も来ます。語劇に合わせて同窓会もしますから、かなり来ています。上級生や卒業生たちは自分たちも語劇をやったので、後輩がどんな風に演じるのか見たいのですね。」

同窓会自体の人数も多くて、1期から11期まで、各学年10人近く来ることもありますから、70~100人は集まります。インドネシア語専攻は縦の繋がりもかなり強いのです。」

— うかがっていると、学生たちはこの語劇を通して随分色々なことを勉強できるのですね。

「そうですね。まずインドネシア語講読。それからインドネシア語作文。インドネシア語から日本語への翻訳。インドネシア語の暗唱。語劇を演じるということは、語学学習の相当な部分を網羅することでもあります。そしてクラスの中での団結力が強まり、縦の繋がりにまで発展するわけで、総合的に良いことづくめです。」

— しかしご指導は大変でしょう。

「もちろんです。語劇をやっている所はどこもそうだと思いますが、教員が相当頑張らないとできないことです。インドネシア語専攻の場合は皆川先生もいらっしゃるし、語学専任の先生方にも恵まれているのでできるのですが、そうでなければ無理でしょうね。私一人では到底できないことです。」

3. おわりに

インドネシア語劇では、台本作成から学生が主体的に関わることによって、語学学習の上で大きな効果が生じるようである。身体的な表現に関心がある学生にとって、演劇は興味を持ちやすいかもしれない。語学学習における語劇のみならず、さまざまなジャンルの教育において、演劇的アプローチは大きな可能性を秘めているのではないだろうか。